

第三百八十六回 青葉会

平成三十年六月二十八日(木) 午後六時〜九時 文京区民センター

〈顧問〉 ☆ 川合万里子 先生

〈選者〉 ◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 在間千恵
豊田ゆたか 中野一灯 星田啓子 山内天牛
伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 山崎亜也
山田けい子 渡邊盛雄
赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明

〈紙上選句〉

M・S氏 村田くに子 山本三恵

《互選句》

七点

☆◎ 十字切り茅の輪を潜くぐる修道女
◎◎ 潮焼のタトウの腕(かいを)舟洗ふ

六点

◎ 島巡る自転車の医師花みかん
◎ 萬緑や縄文の人に会へぬかと

五点

◎ 雨あがり土の香りとあぢさゐと
☆ 更衣バイクの僧の月参り

四点

◎ 黒南風(くろはなま)や役割終へし免許証
☆ 洗ひたての網戸を抜ける風涼し
捨てきれぬ遺品の整理梅雨に入る
花梯悟島の浦曲(うらま)の大没日
ハンモック雲と会話をしてをりぬ
自覚すれど直らぬ猫背梅雨の傘
その利那半歩歩めず夏のなる
水郷を漕ぐ櫓の軋み花菖蒲

吉右衛門の団七

三点

☆ 義父(てて)殺し浴衣ひっかけよろよろと
眺め佳き湯宿のもてなし冷酒(ひき)旨し
蹴る水を無限に拵げあめんぼう
瀬に浸す魚籠(ひく)に岩魚の翳動く
☆ アルプスの水張る田の面(も)梅雨の月

(安曇野)

ひと蹴りに日本(ひのもと)どよめき夏来る
御魂(みたま)眠る碧き海原沖繩忌

◎ 虹二重(ふたえ)何か良い日になりそうな

☆ 詩想逐ひクロオデル読む梅雨晴間

☆ 父の日や片仮名多き北新地

蔵元に蕎麦打ち習ふ出羽の夏

(「澤正宗」の古澤酒造)

梅雨晴間眺めも宜し上(かき)の山

◎ 湯煙りや伊豆熱川も梅雨の中

亡き姉のタンスの奥に京扇

雨の憂さ飛ばす紫陽花生き生きと

昇 (万・孤・彦・灯・正・天・三)

一灯 (万・孤・弘・允・啓・天)

全 (眞・孤・弘・ゆ・天・三)

健介 (五・千・龍・敏・M)

千恵 (紀・孤・敏・M・く)

堂哉 (万・彦・五・灯・天)

盛雄 (眞・孤・灯・啓・三)

そらお (猛・忠・万・千)

忠彦 (堅・眞・ゆ・く)

孤舟 (紀・敏・灯・允)

全 (猛・千・啓・天)

恵洲 (堅・眞・猛・啓)

堂哉 (忠・龍・ゆ・三)

一灯 (堅・孤・弘・ゆ)

紀久男 (万・敏・三)

全 (堅・敏・正)

孤舟 (千・啓・M)

全 (彦・灯・允)

一灯 (万・敏・ゆ)

ゆたか (堅・猛・五)

全 (五・允・正)

けい子 (孤・允・M)

亜也 (紀・万・弘)

盛雄 (眞・忠・万)

紀久男 (龍・正)

全 (五・龍)

猛 (允・く)

忠彦 (紀・天)

全 (千・龍)

二点

一点

☆ 新駅の予定地茅花(まはな)と吹かれ立つ

弘子 (万・三)

愚痴の電話切りそびれみて梅雨募る

恵洲 (正・啓)

老鶯の明けの音昼の音夕べの音

ゆたか (猛・く)

◎ 夏至の日の電車眩しきミニパンツ

全 (龍・灯)

◎ 眉根寄せ詰碁に耽けり夕端居(はしじ)

一灯 (真・孤)

◎ 不快指数疾うに八十越えて梅雨

啓子 (紀・孤)

雲の峰風の使ひと戯れり

けい子 (紀・M)

☆ 寡婦の友冷し中華を買ひ帰る

天牛 (万・忠)

☆ ヴイシソワーズ夕餉の膳に涼をそへ

全 (弘・M)

(冷たいポロネギ風味のジャガイモのポタージュ)

玲瓏(れいろう)たる明石大橋卯波立つ

盛雄 (紀・く)

惜しみつつ紫陽花すべて剪り終へり

そらお (紀)

満腹でも桜桃どどん喰ひ散らす

紀久男 (猛)

梅雨晴れに「酒に対す」を合吟す

猛 (堅)

老鶯は声音(こゝろ)で雨を追つ払ふ

全 (紀)

梅雨晴れ間浮き立つ心おさえかね

全 (千)

免許写真五年老いての更衣

忠彦 (弘)

紋様は神の差配か天道虫

孤舟 (天)

栃の花餃子の町に歴史あり(栃木県佐野市)

五郎太 (紀)

二万地異の遺せし湖(うみ)の夏

全 (彦)

六月や船の舫(もやひ)の風に伸び

全 (彦)

梅雨晴間地下の世界に降りて行く

全 (忠)

(大谷石探石場跡)

☆ 風孕む草伸びきつて夏の庭

全 (彦)

巢燕に園児の声援声揃ふ

全 (紀)

☆ 犠牲出て悟る人災虎が雨

健介 (万)

ハンドル手に緑の山を駆け降りる

千恵 (く)

◎ 緑さす湖畔に流るるピアノかな(芦ノ湖)

全 (紀)

梅雨また良しタカラジェンヌと酌む夕べ

恵洲 (正)

◎ 周到にシエルター背負ふ蝸牛

昇 (孤)

猫じやらしパステル取り合ふ子等の声

啓子 (紀)

亡妻とランタナ手折り夏野行く

規雄 (忠)

大夕焼人生は死のプレリユード

全 (紀)

ゴーオン来てみなとは夏至の映画祭

亜也 (五)

真夜中の甘藍白く乱れけり

けい子 (紀)

筆談で台湾女性と鰻食ふ

天牛 (ゆ)

● 次回青葉会

七月二十六日(木) 午後六時〜九時 文京区民センター

▲ 当季雑詠各自五句 投句は二句

八月二十三日(木) 全

平成三十年六月 青葉会報

一 今回は川口選者以下11名出席。投句9名。猛さんの司会で御覧のようにベテランの一灯さんが好成绩で、昇さん、盛雄さん、健介さん、そして初心者千恵さんが上位得点でした。千恵さん寄贈の純吟「蓬萊」（飛驒高山）、啓子さんのおかき（芝の寿本舗の煎餅）、五郎太さんの大吟醸「出羽錦・一路」、孤舟さんの純吟「村松」（新潟・五泉）、小生の山形土産：澤正宗の米焼酎「雪原」、上の山温泉の古窯のカステラそして三軒茶屋・大黒屋の豆菓子等を賞味。

忠彦さんが手配された軽食も味わいつつ、ワールドカップ、クロオデル等を話題にして順調に進行しました。回覧は孤舟選者持参の「俳句界」七月号「俳句四季」七月号、俳句文学館会報6月5日号。小生の「にぎわう談話室」春の号。

二 関係者近詠

花の宴腹痛むまで笑ひ合ふ

眞希子

雨蛙水神様に仕つかまつる

規雄

小説と漫画併読春うらら

全

―「NHK俳句」7月号

宇多喜代子選

霾るや仮想の中の敵味方

全

ゆつくりと川縁かわべり 歩く薄暑かな

全

未だ浅きお椀の形燕の巢

弘子

―「NHK俳句」7月号

星野高士選

人好きの燕の好きな道の駅

全

郭公や今朝の紅茶はダージリン

正明

右足の小指深爪三鬼の忌

青史

病室に広角窓や緑野揺れ

全

御身拭ひ水あたたかき巢鴨かな

全

高啼いて夜明けを告ぐるほととぎす

全

車椅子の妻を撃つかにさくら冷

全

翔け下り翔け昇りゆく黒揚羽

全

そこに死神そんな気がして鬱金香

全

向日葵の切花副へてなみ見舞

堂哉

花満開立役も兼ね菊之助

紀久男

―俳句文学館会報6月5日号

靄霽るや汽水湖埋む浅蜷舟

全

未だ浅きお椀の形燕の巢

弘子

―「森の座」7月号

小西弘子

人知れず暮るる海辺の合歡の花

川口襄

花藤や砂場に傾ぐ砂の山

全

方眼紙延べたるごとき青田かな

全

垣根からぬうと伸び出て姫女苑

全

躊躇ひつ羞ぢらひ開く水中花

全

品書きの銀宝が今日も無いといふ

全

みづすまし円周率を食み出さず

全

風止みてくるり反転風ぐるま

全

這松の根元らいてうよちよちと

全

奪衣婆の乳房べつたり棕櫚の花

全

雲海の上に残月下に湖

全

軽さうな土よせらるる白牡丹

全

星座表抜け来しやうな天道虫

全

砂浴びの雀砂色朝曇り

全

空想の拡がる宇宙ハンモック

全

―「俳句四季」7月号

青史

遠雷にはや雨音の忍び寄る

全

菊枕閉ざされし夢幾そ許

全

雲の峰若人の船出帆す

全

常ならぬ吐息の白さ妻転倒

全

地球儀より溢れ出でたる夏の海

全

鳥雲に後世を親しとおもふ日々

全

背泳ぎの視界拡がり雲一朵

全

語り部のふいの嗚咽や卯波騒

全

月見草見るものなべて翳深く

全

笑みかくなることが介護よをみなへし

全

落陽と潮騒孕みヨツトの帆

全

流星に妻の上託し寝ねにけり

全

白さしてきし吐息めく月下美人

全

齊粥妻にさみどり濃きとこそ

全

甚平の子は甚平の膝の中

全

胡瓜揉むあるべうもなきことなりき

全

はまなすに潮騒高くなりけり

全

―「森の座」第一回新人賞受賞句より

横走る電光ニュースはたた神

全

―「俳句界」7月号

平成三十年年七月十五日

以上 紀久男記